

当流勸化章（五帖第二十二通）

そもそも、^{とうりゅうかんげ}当流勸化のおもむきをくわしくしりて、^{ごくらく}極樂に^{おうじょう}往生せんとおもわんひとは、まず、^{たうき しんじん}他力の信心ということ^{せんじ}を存知すべきなり、それ、^{たうき しんじん}他力の信心というは、なにの要ぞといえば、かかるあさましきわれらごときの凡夫の身が、たやすく^{じょうど}浄土へまいるべき用意なり、その他力の信心のすがたというは、いかなることぞといえば、なにのようもなく、ただひとすじに、^{あみだに}阿彌陀如来を^{いっしんいっこう}一心一向にたのみたてまつりて、たすけたまえとおもうころの、^{いちねん}一念おこるとき、かならず^{あみだに}彌陀如来の、^{せっし}攝取の^{こうみょう}光明を^{はな}放ちて、その身の^{あば}娑婆にあらんほどは、この^{こうみょう}光明のなかに^{おさ}摂めおきましますなり、これすなわち、われらが^{おうじょう}往生の^{さだ}定まりたるすがたなり、されば、

南無阿彌陀仏と申す体は・われらが他力の信心をえたるすが
たなり、この信心というは・この南無阿彌陀仏のいわれを・あらわ
せるすがたなりとこころうべきなり、されば、われらがいまの他力
の信心ひとつをとるによりて、極樂にやすく往生すべきことの・さら
になにの疑もなし、あら殊勝の彌陀如来の本願や・このありが
たさの彌陀の御恩をばいかがして報じたてまつるべきぞなれば、た
だねてもおきても・南無阿彌陀仏ととなえて・かの彌陀如来の
仏恩を報ずべきなり、されば、南無阿彌陀仏ととなうるこころ
はいかんぞなれば・阿彌陀如来の御たすけありつるありがたさと
うとさよとおもいて、それをよらこびもうすこころなりと・おもうべき
ものなり、

あなかしこ

あなかしこ

当流勸化章の大意

浄土真宗のみ教えをくわしく知って、浄土に往生しようと思
う人は、まず他力の信心を知らなければなりません。他力の信
心は、この罪深い私たちのような凡夫の身が、たやすく浄土に生
まれるための用意なのです。

他力の信心とは、自力のはからいを捨て、ただひとすじに阿弥
陀如来に帰命して、おたすけくださいとおまかせすることであり、
その信心がおこるとき、かならず阿弥陀如来は摂取の光明を放
つて、命のあるかぎりはその光明の中におさめとってくださいなのです。
それが、私たちの往生が決定したすがたです。

ですから南無阿彌陀仏とは、私たちが他力の信心を得ているすがたであり、信心とは、南無阿彌陀仏のいわれをあらわすすがたです。私たちが他力の信心を決定すれば、浄土に往生することとはまったく疑いありません。

ああ、なんとすぐれた阿彌陀如来の本願でしょう。このみ仏のありがたいご恩をどのようにして報じるかといえは、ただ寝てもさめても南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏と称えて仏恩を報じるのです。その称えるところは、み仏がお救いくださるありがたさ、尊さを思っ、それを喜ぶところであると思うべきです。